オボコ娘の花丸レポート

自由（ラク）に生きる方法

（ヒステリー治療によせて）

山田花子

この世には数えきれない価値感（カミサマ）が互いに相反し合いながら、ひしめいている。精神分裂病を代表とする心の病いが生じるのも当然である。かく云うわたくしも、長年に渡るヒステリーの発作に悩まされ、友人、兄弟、親や医者に相談してみたけど、結局他人にたよってもしょうがない、という事が判っただけであった。他人なんてアテにしてる内は決して心の病は治らない。

〜〜〜そこで自分なりに少ない知恵をふりしぼってヒステリーの原因を考えてみた。ヒステリーとは要するに「かんの虫」である。夢と現実の落差（ギャップ）が激しいと、そのわだかまりの摩擦により、生じる発作だ。

〜ひとの心は本来自由で悟っているはずなのだ。

しかし現世にはびこるウソと、世界の矛盾が人々の心を知らない内に屈折させ、不自由なものにしてしまっている。

〜自由を手に入れる為には「ワル」にならなければならない。なにも改造バイクにまたがって深夜の国道を爆走しよう等というのではない。真の意味での不良だ。思うに、一般的に不良の格好をして、いかにも「反社会的」行動を取る人達に限って、根は前向きで、根底にあるものは、しっかり「人の道」している。

自由な心とは、わたくしにとっての逆説の様だが「何も信じず、夢は持たない事。」もちろん人に嫌われたくないから表面上、「前向き」を装いつつ、心の中には何の希望も持たない。

この世の中では、前向きに、何かを信じて生きてかなきゃいけないみたいなプレッシャーがある。ダメな奴がいくら努力したってムダなのにだが、そんなことを言ったら、にらまれてしまう。でもカラスがいくらがんばったってクジャクにはなれない。この矛盾幻想が人民を不幸にしているのを、どのくらいの人が気付いているだろう。実際、人生は思い通りになんかならない。生れつきのさだめを選ぶことはできない。或る者は一生何不自由なく楽しく遊び暮らし、同じ時間に或る者は苛酷な運命を強いられる。この不平等、不条理そしてだれちゃならない絶対の孤独。こんなものなのだ。もともとこの世はヒドイ所なのだ。それが「ふつう」なのだ。カタワ者達よ、泣け！わめけ！宿命を呪え！てめえの人生こんなものだ。イヤなら自殺しちまえ。死ぬのが怖ければ仕方なくガマンして、生きて行くしか無いだろう。誰かにすがろうとしたって、味方なんて居やしない！救いを求めようったってそうはいかない。大体、悟りさえ開けば、幸福になれそうな錯覚しがちだが、わたくしはむしろ、悟りの心境とは空しい、やるせな〜い気持だと思う。生きている限り、苦しみと悲しみは続くのだ。仕方ないのだ。だけど、この真実が公になってしまうと世の中から光が失せてしまうから、人々は真実を訴える者達をいつの世でも迫害し、魔女狩るのだ。バカはバカなりに、ブスはブスなりに、さだめに合った生き方をするのが「自由」なのである。「若者のくせに老成してる」となじるなら好きにしてくれ。

『コミックBOY』（清出版）　1990.10月号より

東中野辺りで「詩人・鈴木ハルヨ」を見かけたら知らせてほしい。

高市俊皓（父）

一九九二年五月二四日夕刻、我愛娘高市由美—漫画家・山田花子—は高層住宅の十一階から飛び下りて自ら命を絶った。享年二四才、余りにはかなく、余りに短い生涯であった。その死顔はこの世の一切の煩悩—苦しみ、悲しみ、怒り等—から解き放たれた如くに穏やかで安らかなものであった。遺書はなかった。ただし、五月二二日付日記に以下のような記述があった。数年間に亘って書き続けてきたノート十五冊に及ぶ膨大な分量の日記の本体部分は、この日をもって終わっている。

*召されたい理由（ワケ）
①いい年こいて家事手伝い—厄介者、ゴクツブシ、世間体悪い。
②他人とうまく付き合えない。暗いから友達一人もできない。
③将来の見通し暗い。勤め先見つからない。（いじめられる）
④テーマがなくなった。もうマンガ書けない＝生きがいがない。
⑤家族にゴハン食べさせられる。太るのはイヤ。
⑥もう何もヤル気がない。すべてがひたすらしんどい、無気力、脱力感。
⑦「存在不安症」（胸痛）の発作がくるしい。

対人関係、経済生活上のいきづまり等他の諸問題を無視することはできないとしても、自ら袋小路に入り込んでしまいマンガが書けなくなってしまったことが、死を決意するに至った最大の原因であっただろうと思う。

山田花子はこの十年余り、対人関係—いじめ—を唯一のテーマにしてマンガを書き続けてきた。「いきずまり」は不可避であった。もし、山田花子が対人関係・人間関係を現存する社会の諸関連の中に置いて考察し直したならば、今後尚同一のテーマで書き続けたとしても、いきずまるどころか一層深みのある作品を生み出すことができたであろう。

現存する社会—資本制的社会—においては、芸術家も含めて人はただ自己の生産物を、或いは自己自身を「商品化」することによってのみ生存することを許される。従ってまたこの社会では人と人の関係は、商品を、或いは「商品化された自己」を媒介としてのみ取り結ばれ形成される。しかも尚、商品生産社会においては、弱肉強食の競争こそが、人と人の関係を律する支配的な法則となるのである。

「この世＝弱肉強食、あの世＝愛と平等」（日記から）。山田花子は、来世こそ、人々が真に自由・平等であり、誰もが経済的な制約から解放されて最大限個性をのばし発揮することができるような「理想郷」であると確信することによって、現世の苦しみに耐えてきた。私は全く逆に、「理想郷」は、現世で実現してこそ意味があるのであり、また実現可能でもあると確信している。けだし、長く続く、苦痛に満ちた苛烈な闘争なしに、現世で「理想郷」を実現することはできない。もし、このことを認めたとしても、余りにも感受性が強く、また余りにも繊細な山田花子は、この苛烈な闘いによく耐え得ないであろう。

山田花子は、至福の理想郷—メルヘンの世界—の存在を信ずると共に、「輪廻転生」の思想をも信じていた。山田花子が、「理想郷」に辿りつくことができたか、どうかは定かでないし、また何時転生して再び現世に姿を現すのかも定かでない。唯物論者たる私は、来世の存在も、輪廻転生の思想も信じてはいない。だが、もし万一、読者のなかの誰かが、東中野辺りで「詩人・鈴木ハルヨ」を見かけたら知らせて欲しい。死の数週間前に、山田花子は詩人鈴木ハルヨに転生し再出発すると「予言」したのである。山田花子の日記には、詩人・鈴木ハルヨ、性格明るく、おしゃべり好き、一九七一年四月十二日生まれ、二〇才、血液型B型、新潟県出身、住所・中野区東中野一—●二—●六（●山荘D室）、TELナシ、と書かれている。

虫愛でるヒメだった娘へ

山田花子ではなく、私にとっては、由美という存在であった娘が、私達の許をだまって去ってから、半月を過ぎました。瞼に浮かぶ娘は、無邪気に屈託なく笑っています。

子供時代、そして死に至る迄の娘は、内気で感受性が強く、やさしさを秘めた子でした。親の私にとっては、とても楽しい存在でした。雲の切れ間に見える月を眺めて「お月様が舟に乗っている。ゆらゆらゆれている。」（5才）と言って、将来は詩人になれるかもなんて、期待をしてしまいました。何気なくつぶやく言葉に私の心は踊ったものです。

2才の時に郊外の自然豊かな団地に移り住み、3才から保育園に通っていました。その当時の連絡帳があります。娘の日常生活を保母さんと遣り取りしたノートをよみかえすと、いろいろなことが思い出されます。

娘は人形よりも、虫や鳥、動物が好きな子でした。飼っていたもの：トカゲ、バッタ、テントウ虫、ハムスター、インコ、文鳥、イモリ、ミニウサギ、猫、その他多数。1才頃地面に座り込んで「アイしゃん、アイしゃん」と動き回るアリを、じっと見ていたことがあります。

叔父から4才の誕生祝に贈られた昆虫や動物図鑑を読みたくて、文字を覚え、虫の名前や生態を詳しく知っていました。小学校低学年時代「昆虫博士」と言う名前を友達から貰った程です。カタツムリに夢中になっていたのもその頃です。水槽に入れて、ニンジンやキュウリの餌をやっていました。カタツムリの糞は餌と同じ色をしているのだと教えてくれました。カタツムリの卵が1～2㎜で真珠色をしたとてもきれいな卵であることも、私は知りました。

3年生の頃、アゲハの飼育に夢中になり、カラタチの葉についている卵を取って来てはイチゴの空きパックに入れて育てていました。料理用の山椒の葉、パセリは丸坊主、ミカンの木も買いました。羽化したアゲハが大空に飛び立つ一瞬を2人で見送ったこともあります。保育園の頃の夢は、「動物園の飼育のおばさん」になることでした。

もう一つ、娘が夢中になっていたことは、絵本作りでした。1才頃から眠る前に絵本を読み聞かせするのが、日課でした。話を聞きながら、空想の世界に浸っていました。

5才頃から画用紙を切ってホチキスで止め、鳥や動物を主人公とした絵本を、毎日書いていました。自由に伸々と彼女の夢の世界を描いていました。私が読んでも楽しかったあの絵本の数々、大きな紙袋にぎっしり詰まっていたあの絵本はどこに行ってしまったのでしょう。何にも拘らずに空想の世界を描いていた娘は、どこへ行ってしまったのでしょうか。小学校に入学しても、先生の話を聞かずに教科書やノートに絵ばかり描いていて、よく注意されたようです。「漫画のことしか頭にない」とお叱りを受けたこともあります。6才頃のノートに、保育園に登園する時、「ママ、固く手を握っていてね。別れる時には手を振ってね」「ママは知らないうちにどこかへ行ってしまって、帰ってこないから」とありました。仕事の都合で娘が眠っている間に出勤したり遅く帰って来る私が、どこかへ行ってしまうという不安があったのかも知れません。子供時代、もっともっといつも娘の傍らに添ってやればよかったと後悔の念がよぎります。

誰にもサヨナラを言わず、別れの手も振らずに行ってしまいました。職場の3階の窓から、娘の飛び立った高層住宅が見えます。毎日、私は窓辺に佇んでは、娘は自由な世界へ向けて空を飛んでいるのかなと思ってしまうのです。

読者の皆様、青林堂の方々、漫画家の皆様ありがとうございました。ガロの誌上をお借りしてお礼を申し上げます。

1992・6・9　母記

高市裕子（母）

ダイビング・プリンセス　山田花子

井口真吾

我々は、この世にある日引っ張り出され、ちょっとばかりちやほやされたあとは、無理矢理おぞましい学校に放り込まれ、競争を強いられ、ランクづけされ、あからさまな差別のもとにしかるべき場所にあてがわれて生きてゆく。

この世のシステムやセンスが大好きな者ならここは天国だろうが、大嫌いな者にとっては地獄にも等しいだろう。多くの者は両極の中間あたりを行ったり来たりしながら、この世についての感想を述べ合い、やがて年老い、分かったような分からなかったような人生を終えることになる。

私は、山田花子を、彼女が漫画家になる前から知っていた。

私達が展覧会を開くたびに、彼女はきまってやって来た。不思議な感じの、やせっぽちの美しい女の子の姿はとても目立った。

そのうち彼女は、何億年も前から決めていたかのように十代で漫画家としてデビューし、極めて特異な作品を次々と発表してゆくことになる。

作品は明確なテーマを持ち、テーマは最後まで変わることはなかった。

彼女は普通の人間には及びもつかないほど敏感で傷つきやすかった。

感受性の強すぎる彼女は、多感な頃に心に酷い傷を負い、そのキズはトラウマとなり、作品の絶対的モチーフとなってゆく。

傷はふさがらないように指でおし開かれ、痛みが薄れないように塩をすり込まれ、いつもイノセントな血を流していた。

一日中その傷口ばかり見つめているうちに、彼女はいつしかその傷の中に住みつき、そこが彼女の世界となった。

彼女は外界と接触する時も、大きな傷口にすっぽりと被われたままだった。透明な傷口をとおして見える外界では、無神経で獰猛な連中がナイフを手にして、欲望にむくみながら、うそくさい街をうろついていた。彼女と彼等を隔てているものは、心の傷で作られたフィルターだったが、彼女はフィルターを取りはらおうとはしなかった。彼女は人間でいることよりも、嘆きの天使でいることを選んだのだ。

山田花子にとってのこの世とは神の悪ふざけとしか映らなかったのだろうか。

彼女が暮した心の傷口は、そこでの激痛と同化している限り、外界で繰り広げられる神の悪ふざけから逃れることのできる唯一のシェルターだったのかもしれない。

この世は、生を前提として存在している。そして、この世の輪郭をあの世が決定している。あの世への入口は、死ぬことによって開かれる。もしも、あの世がこの世よりもずっと楽しい所であれば、誰もが先を争って大喜びで死んでゆくことだろう。そうなれば、生を失ったこの世は亡んでゆくことになるだろう。

この世は、自分の存在を守るためにあらゆる手を尽くしてこの世に人々がとどまることを工作する。夢や希望や美やセックスやプリンや金や名誉や宗教をちらつかせ、生がこの世に絶望することを防ごうとする。

何故、山田花子の生をこの世はとどめることができなかったのか。

山田花子という名前は奇妙である。最も平凡そうだが、それが珍しい名前であることは誰もが知っている。少しふざけても見えるが、驚くほど真面目そうでもある。なつかしく、一度聞いたら生涯忘れることはないだろう。

彼女は、若く美しく才能があった。雑誌、ラジオ、テレビ、映画に登場し、スタッフの間でも高い評価を得ていたという。これからももっと色々な活躍を期待されていた。

しかし、この世は彼女を引き止めることが出来なかった。

彼女の鍛え抜かれた技術と才能が、この世の誘惑を寄せつけず、彼女の美しさとプライドが、道を引き返す屈辱を受け入れなかった。

彼女は一度も負けることなく勝ち進み、ついにはビルの屋上からダイブした。

あのセックス・ピストルズのジョン・ライドンでさえ、ダイビングは満員の客が作ったネットの上と決めていたのに。

山田花子亡き後の我々は、資本主義に買いたたかれてすっかり幻想のすり減ってしまったこの世で、気恥しい猿芝居を愛をたよりに演じてゆくことになるのだろう。分かったような、分からないような気持のままで。

山田花子さんの御冥福を祈ります。